

2012.9.27

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

Newsletter



天国と地獄：総合チームリーダーに就任して

総合教育科目構想・運営チームリーダー／本学経済学部教授 中島 俊克

全カリ総合科目は、受講する学生にとっては「天国」、教える側、とくに科目を編成する側にとっては「地獄」です。このニュースレターの前々号に掲載された、私の総合チームメンバーとしての就任挨拶でも触れましたが、私は長年、全カリの特別教務委員・専門委員（総合）として、「大人数科目対策」に携わってきました。事務局ともども、まるでモグラたたきのような「大人数退治」に取り組んできたのです。本年度からカリキュラムが一新され、自然科学系科目の履修に関する縛りがなくなった上に、全科目が抽選登録となったため、履修者が500人といった「超」大人数科目は幸い姿を消しました。けれども、受講者数250～300人の科目が激増してしまい、問題はかえって顕在化したと言えるかもしれません。リーダーに就任したのを機にさらに本腰を入れてこの問題に取り組む所存です。

かつては1,000名を超えることもザラだった、全カリ総合の大人数科目は、立教大学の教育面での最大の「恥部」と言われていました。期待に目を輝かせて立教大学の門をくぐった新生は、そうした授業に出たとたん、マンモス教室の喧噪と、レポート1本で単位を出してくれる教員に驚きあきれ、入学までの向学心はどこへやら、サークルの先輩の勧めるままに、全カリ総合を中心に「楽勝科目」を履修しまくって、浮いた時間を好きなことに使うという「合理的選択」へと導かれていったのです。各学部がきめ細かい少人数教育などで学生の「やる気」を保とうといかに努めても、「楽勝」の全カリ総合がある限り、そうした努力の多くは尻抜けになってしまいます。悪いのは学生ではありません。こうした仕組みを作ってしまった大学自身が責任を負うべきなのです。

国公立と違い私立大学は、多数の学生を入学させるので、一部で良い教育を行おうとすると、他のどこかへしわ寄せが来がちです。発足当時6割だったはずの全カリ総合科目の専任教員担当率は、最近では実質3割を切っています。一般教育部の廃止によって語学以外の導入教育を各学部が基本的に担うようになり、各学部が頑張るのに反比例して、全カリ総合の（人員面での）空洞化が進んでしまったのです。その結果そうした学部の努力が

上述のように尻抜けになることがあっても、これは一種の「合成の誤謬」で、各学部が悪いわけではありません。各学部が所属学生の4年間の教育全体に責任をもつ体制の下で、学部教育の維持向上を託された各学部の教務担当者が、自学部教員の全カリへの出講を「他学部学生へのサービス」と捉えがちになるのは当然で、繰り返しますが仕組みそのものに原因があるのです。総長はじめ立教大学の多くの教員にこの問題が自覚され、本年度開始の新カリキュラムが実現したばかりでなく、さらに「統合カリキュラム」等の議論が進みつつあるのは喜ばしいことです。

本年度からの新カリキュラムで、専任教員が担当する「領域別科目」が多数作られたことは、着実な一歩前進です。さらに、学生は自学部提供の領域別科目をとることができないという「縛り」を初めて設けたのも画期的なことです。「全学部・全学年が自由に履修できる」というのが全カリ総合の基本コンセプトですが、学生数が2万に近づいた現在、この原則を完全に維持することは至難です。カリキュラムの次の大改訂は2016年ですが、全カリ総合科目の履修についての「縛り」はそこではさらにきつくせざるを得ないでしょう。リベラルアーツと全人教育の理想は失ってはなりません、本当に学生のためを思うなら、全カリ総合がその創設にあたって基本的前提とした考え方から多少遠ざかるのもやむを得ないと私は考えます。

欧米のリベラルアーツ・カレッジには、学生よりも教職員の数が多いところがザラにあります。本来のリベラルアーツ教育というのはそれぐらいコストがかかるものなのです。日本の私立大学で多少なりともそれに近いことが実現可能なのはごく一部の、特別に財政豊かな学校に限られるでしょう。もちろん立教大学はその中に含まれません。「リベラルアーツの立教」と称しながら、かつて（戦後ある時期から）の本学は、マスプロ教育の上にリベラルアーツの香水をまぶしていただけでした。各方面の努力により、事態は幸い改善されつつあります。私は今後も与えられた枠の中で、全カリ総合をそのあるべき姿に少しでも近づけるべく粉骨する覚悟です。

目次

天国と地獄：総合チームリーダーに就任して	中島俊克 (1)
新メンバー紹介	森聡美／佐藤邦彦／溜箭将之／西山志保／山高博 (2)
全カリ科目を担当して	グトワ・エカテリーナ／神田工／柿原泰／松山伸一 (4)
大学教育学会参加報告	下地秀樹／飯塚琴乃 (6)
2012年度全学共通カリキュラム運営センター 名簿	(8)

【新メンバー紹介】

就任のご挨拶

英語教育研究室主任／本学異文化コミュニケーション学部准教授 森 聡美

この度、藤田保異文化コミュニケーション学部教授の後任として英語教育研究室主任を務めることになりました。宜しくお願いたします。

私が本学に赴任したのは8年ほど前になりますが、この間全カリ英語必修カリキュラムは2006年度、2010年度と2度にわたる大きな改革を経てきており、時代の要請に応えるべく改良を重ね、内容を充実させてきました。ことに2010年度新カリキュラムは、受容スキルの集中的訓練に特化した科目を除き、徹底的な少人数化を図ったのが最大の特徴といえるでしょう。プレゼンテーション、ライティングについてはそれまでの同等科目のほぼ半分に当たる20名に、そして効率よく意見交換を行う力を養うことを目標とする新設のディスカッションクラスについては1クラス8名程度とし、学生一人一人の参加度を高めるのと同時にきめ細やかな指導が可能となりました。さらに、必修修了後も各個人の目標、目的に合わせた英語学習が継続できるように設計された言語副専攻制度が2011年度より走り始め、2012年度は全面展開を迎えるに至りました。

また、大学全体の動きとしては、この8年間で新学部が3つ（2006年度に経営学部、現代心理学部；そして2008年度に異文化コミュニケーション学部）、そして新学科も複数誕生しました。その結果、1年次生全員が受講する英語必修科目の履修者数は3,000人台だった8年前に比べ4,500人を超える大所帯となったことは言うまでもありませんが、以前にも増して多様な専門学部で学ぶ学生達を抱えることになったことも認識する必要に迫られているとも感じています。

ますますグローバル化が進み、国内外を問わず若い世代が二つ目、三つ目の言語を使って見識を広め、多様なバックグラウンドを持つ人々と交流を深め、問題解決に挑み、多様な場で活躍することが期待される時代となった今、外国語を駆使する力、ことに英語力はより多くの社会人に求められる能力であることは言うまでもありません。このような時代にあって、大学における英語教育に求められるものは何か、そして10学部の学生達を教育する責任を負う全カリの英語教育の形はどうあるべきか、改めて考える時が来ているように思います。

立教に着任した当時は、全学規模の英語カリキュラムを4年前後の短いスパンで見直し改革していくそのペースと、改革に費やされる膨大なエネルギーに目が回る思いでした。しかし、それは時代の変化の速さ、そして求められる英語力の変化を考えれば当然のペースなのかもしれません。創意工夫と試行錯誤を重ね、皆様のご理解とご協力を得ながら、より充実したカリキュラムの開発に向けて前進していきたいと考えています。

教師にとっての「学び」

スペイン語教育研究室主任／本学異文化コミュニケーション学部教授 佐藤 邦彦

この4月にスペイン語教育研究室主任に着任した。過去にも何度か経験した主任だが、着任するたびに新たな課題や検討課題を改めて認識させられる。何度か経験してもまさしく「新入り」のような主任だが、ご挨拶がわりに今の感慨を少し述べさせて頂こうと思う。

考えるべき事は多数あるわけだが、比較的最近の動向の中で特に私の意識に上る事のひとつは、言語副専攻（特に「基礎科目」）である。中級レベルの「基礎科目」は、2年次で履修するのが順当と言えるが、現実には必ずしも思惑どおりに動いてはくれない。時間割の都合等で思うように取れない場合もあれば、3年次以降になって改めて継続学習を志す人もいだろう。副専攻修了を目指さずに単体の自由科目として履修することもできる。このように履修者のニーズや状況は多様化している。学生の到達度やモチベーションの多様性は常に存在することだが、かつて中級レベルを2年次必修科目として展開していた旧カリ時代以上に、科目担当者の苦労が増しているのも事実である。授業内容や進め方、教材の選定等々、今後のための検討課題は多い。

今年で3回目の実施となった「スペイン語海外言語文化研修」は、既に軌道に乗っている感がある。今年は参加者が急増して23名。担当者としても研究室としても嬉しい限りだが、その分、現地でのサポートや、とりわけ危機管理について「抜け落ち」がないよう、注意が必要になってくる。

今述べた事はほんの数例だが、色々ある中でもやはり、スペイン語履修者全員に課せられる1年次必修科目は特に重要である。初級とはいえ学習者に相当の努力が求められるのは勿論だが、「学生の質の変化」が言われる中、教員側の工夫もますます重要視されてきている。その場合、学生の意識や学ぶスタイルの変化に目を向けるのは重要だが、「今は皆こうだから…」というような、柔軟とも諦めともつかない発想に陥らないようにしたいものだ。

大学の授業も一種のコミュニケーションである以上、差異と同時に通低するものを見据える知恵を持たなければ対話は成立しない。学生とのギャップを感じる時こそ、それが教師にとっても大いに学ぶチャンスであることを忘れないようにしたい。実際の言語教育の方法にしろ、学ぶことの意義にしろ、教師にとっての「学び」の精神を忘れずに今後とも考え続けていきたいと、改めて思う。

就任のご挨拶

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学法学部准教授 溜箭 将之

新しくチームメンバーになりました、溜箭将之（たまるやまさゆき）でございます。どうぞよろしくお願いいたします。普段は法学部におまして、初めて全カリに関わる中で、周りが分からないことばかり、というのが正直な感じです。

最近ようやくわかってきたことのひとつが、全カリのチームミーティングの席と法学部の教授会の椅子との温度差です。全カリは専任スタッフで埋めるものという理念に燃える席と、全カリの負担を何とか特別枠でしのごうとする醒めた座と。私自身は全カリに敵意はないつもりで、法学部の提供する法学系科目を担当して、今年の後期で4回目になります。当初は、講義形式ながら10人程度しか学生が集まらず、急きょ自分が学生時代に属していた大学の水泳部（水球をしていました）から後輩をサクラに呼んだりもしました。その後、初回から「民主主義とはなんだろう？」などと無茶な問いかけをするのを止めるなど工夫をし、なんとか人数も70～80人に増えてきました。

熱い石であれ、冷たい石であれ、石の上にも三年というつもりで務めてゆきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ナニ、3年モ務メルツモリカ、というご指摘もあろうかと思いますが、そこは若輩の私にとりとり知らぬ領分に属しますので、そのあたりご理解を。改めて、どうぞよろしくお願いいたします。

幅広く学べる総合教育科目

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学社会学部教授 西山 志保

このたび全カリ総合構想・運営チームメンバーを拝命しました社会学部の西山志保です。どうぞよろしくお願いいたします。若干のご挨拶をさせていただきます。

2010年に立教大学に着任しました。それ以前から社会学部の兼任講師として全カリ科目を担当したこともあり、全カリにはなじみあるものの、今回初めて総合の運営チームに参加させていただくことになりました。毎回、新しい議題やしくみを理解するだけで、精一杯のところはありますが、和気あいあいとした雰囲気ของทีมミーティングにおいて様々な話し合いをしています。全カリの科目を拝見しますと、「立教ゼミナール」という異なる学部学年の学生がゼミ形式で行う授業や実際に街を歩くという実践を取り入れた講義など、非常にバラエティに富んだ魅力的な講義が多いのが印象的です。

これまで約半年間の具体的な仕事としては、運営チームメンバーとしてキャリア支援委員会に出席したり、7月には全カリ総合教育科目担当者連絡会ということで、全カリを担ってくださっている専任教員・兼任講師の先生方に向けて全カリの全体像や、成績評価、授業運営などについて説明し、意見交流会を開催しました。またそのプログラムにおいて、全カリ科目の授業紹介ということで、主題別A科目とスポーツ実習科目から、非常にユニークな取り組みをされている2科目の担当者に、取り組み事例の紹介をお話いただきました。先生方が様々な工夫をしながら、学生の主体性を引き出すような講義をされていることがわかる、良い機会になったと思います。

私の専門は、都市社会学・地域社会学という領域で、市民が主体のまちづくりやコミュニティづくりなどを研究しています。地域社会における大学の役割が大きくなる中、世界に羽ばたくためのグローバルな教養知識の習得から地域貢献を含めたローカルなノレッジの習得まで、幅広く学べる学際的な全カリの重要性はますます高まっています。メンバーの一員として、新カリキュラム運営について貢献できればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

学部と共通教育

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学理学部教授 山高 博

立教にお世話になって9年目、全カリでは授業担当の経験はあるものの、全カリの体系・組織やその背後にある理念に無知な新人がどれだけ貢献できるか、手探りでスタートした。経験豊富な諸先生方と練達の事務局の手慣れた段取りに導かれて前期の役割をはば終えたが、後期からがチームメンバーの仕事の本番ということで、気を引き締めている。

昨年度、学部長から全カリの構想・運営チームメンバーにと言われたとき、ベテランの前任者に比べて何も知らない自分では足手まといになるだけだと思ったが、二つの事柄が頭をよぎったため、引き受けた。第一は、何事でもプロ集団が洗練されればされるほど、事情を知らない素人の感覚が役に立つこともあるということである。まあ、ある種の言い訳、開き直りの類いではあるが。第二は、階層構造をした組織の中では、できるだけ多くの構成員が全カリのような別のレベルの活動経験を持つ方が良いということである。特に、全カリの運営を担当する教員は固定されやすい傾向があり、これは必ずしも好ましいことではないと思っていた。もっとも、定年間際の人間がふさわしいかどうか、問題ではあるが。

もう一つ、打診を受けた時には意識していなかったことではあるが、昔聞いた言葉が影響したのかも知れない。まだ若い院生だった頃、博士課程の研究は学部ではなく大学付置研究所で指導を受けて行った。その時の敬愛する指導教授は、「自分は50の半ばも過ぎて、本当は研究所にいてはいかんのだよ」と言われた。研究は頭の柔らかい20代、30代が中心となってやるもので、40代になったら学部で研究教育をやり、50代後半になったら共通教育に携わるものだ。大先生にはずっと研究活動に専念して欲しいと思ったが、この言葉は忘れられずにいた。今、60代の自分が全カリの活動に何らかの役に立てば、恩師の言葉に返事ができるかも知れないと思っている。

【全カリ科目を担当して】

「ロシア語セミナー」を担当して

本学兼任講師 グトワ・エカテリーナ

私の担当している「ロシア語セミナー」は週一回の授業です。履修者は6人ほどの小人数のクラスですが、いつも熱心な学生ばかり集まります。それぞれの履修者の希望にも合わせながら、文法事項を確認し、会話の表現を覚えて、ロシアの文化や習慣に触れるという学習を限られた時間の中でバランスよく行う授業を目指しています。

学生たちがロシア語の勉強を始めたきっかけは、「文化や歴史に興味を持った」、「ロシア語のひびきが綺麗だから」、「キリル文字が面白いから」などさまざまです。ロシアでは小学生のころからキリル文字を筆記体で書いています。そのためロシア語セミナーでも、板書や宿題も筆記体で書くことにしています。難しいという声もときには聞こえてきますが、練習をいっぱいして、慣れるより他ありません。実際のところ、学生たちはロシア語の筆記体をとっても綺麗に書いています。

聞き取りの練習のために、少々古いですが、ユーモアがあって、楽しいビデオ教材を使っています。学生たちは課題に向けて一所懸命聞いていますが、くすくすと笑い声も聞こえます。怠け者の厳しい奥さん、弱気で可哀そうな旦那さん、いつも奥さんの味方になる犬が最後の結論を呟くという不思議な家族ですが、不思議だからこそ台詞が記憶に残ります。

覚えた会話の表現をロールプレイ形式で実際に使ってみます。お店で買い物をしたり、レストランで食事を注文したり、道や時間を尋ねるなどの実際のシチュエーションを授業で再現して、会話に挑戦しています。みんなで東京にあるロシア料理レストランに行き、ロシア人のスタッフにロシア語で注文してみようという計画もあるのですが、冬まで延期することになりました。ロシア料理は美味しいですが、カロリーがやや高めですので、寒い季節の方が合うかもしれません。また文化の紹介として、ロックミュージックを聴いたり、映画の一部を見たりもしています。完全に生のロシア語の中から知っている言葉を聞き取れると学生たちの目がきらきら輝きます。

履修者の中で既にロシアへ行ったことがある学生もいます。ウファという都市です。ウファはロシアの中央部に位置するバシコルトスタン共和国の首都で、旅行先としては珍しいと言えます。公用語はバシキール語以外に、ロシア語も使われています。その学生は現地でもロシア語を使い、日本に帰ってきてからもウファでできた友達とロシア語で連絡を続けています。また、今年の夏休みにモスクワとサンクトペテルブルクへの旅行を控えていて、一所懸命、旅行のために使えそうなフレーズを覚えて、わくわくしている学生もいます。

秋には全員で、ロシア語能力検定試験を受験することになりました。目標が決まりましたから、前期の授業から2週分を検定対策にあてました。日本人は“がんばって”とよく言うので、ロシア語では、それを何というのかよく聞かれます。ロシア語ではシチュエーションによるので、一つだけの便利な言葉はありませんが、勉強や仕事などで「ご成功をお祈りします」という意味の表現をよく使います。Желаю вам успеха! (ジェラーユ・ヴァム・ウスパーハ)。それはロシア語の学習者にも、みなさんにもお送りしたい言葉です。Желаю вам успеха!



「全カリ」でポルトガル語を学ぼうとしている諸君へ

本学兼任講師 神田 工

他の「全カリ言語教育科目」についてはあまり知らないが、隔年で開講される「ポルトガル語1」には例年30名程度の学生が履修登録をする。この数はかなり多いな、というのが当初の個人的印象であった。一つの外国語を曲がりなりにも習得するために投入されるべき、精神的、肉体的エネルギーはいかほどか、大多数の諸君は英語の習得に際してすでに経験しているはずだが、それを踏まえて登録しているのだと、迂闊にも私は考えていた。

「ポルトガル語（ポルトガル語のこと）は、しゃかりきになってやるものじゃないですからねえ」、これは数年前、ある学生が私に向かって発した言葉である。彼は、「ポルトガル語1, 2」のみならず、翌年の「ポルトガル語3, 4」も履修し、彼なりに積極的に授業に参加し続け、授業の後には何度か、ポルトガル語やブラジルにまつわることにとどまらず、様々な話題で私と雑談することがあった。彼は実に率直に自分の本心を明かしてくれたのだと思う。この言葉を聞いた瞬間、私が何年か抱いていた「全カリポルトガル語」を履修する学生についての疑義が氷解したように感じた。

「ポルトガル語1」で30名程度はあった学生数は、「ポルトガル語4」では多くても数名程度になる。これも例年のことだ。上にその言葉を引いた学生のいた年などは、「ポルトガル語4」の履修者はこの1名だけだったと記憶している。興行ではないのだから、履修者数の多寡に一喜一憂してもしょうがない、などとうそぶくこともできないような状況ではあった。「ポルトガル語1」の開講時、あれほど目を輝かせてこちらの話に熱心に耳を傾けていた諸君が、わずか一年余りで消散してしまうとは、一体どういうことなのか。これもひとえに教師の力量不足かと自責の念にもかられたが、「まてよ」と思い起こすこともあった。

筆者の学生時代、身の程知らずにも教養科目のラテン語を履修したことがある。外国語学部の学生が対象であるためなのか、中程度の規模の教室（百数十名程度収容）が、初日はほぼ満員である。その学生数が、一回授業が進むたびごとに減少していく。あたかも、マラソンのサバイバルレースである。次々に脱落者が出て、一度脱落したらまず先頭グループには戻ってこれない。あの脱落率のひどさの原因の一端は、もちろんラテン語の「難しさ」であろうが、それに加えて、担当されていた先生にはまことに申し訳ないが、授業の無味乾燥さも手伝っていた。

あのラテン語の授業と比較考量した時、「全カリポルトガル語」で扱うポルトガル語の「難しさ」は、記憶すべき情報の量という観点からいって、たかが知れているし、授業が無味乾燥なものにならぬように私なりに「サービス」はしているつもりだ。にもかかわらず、なぜ多くの諸君がポルトガル語の学習をかくもあっさり投げ出してしまうのか。自慢話めくが、私は何とかこのラテン語の授業の単位を取りおせした。それは一緒にこの授業に参加していた、成績優秀で心やさしい友人のHさんが怠惰な私に授業ノートを何度も貸してくれたことが外的要因の一つであるが、何よりも、周囲に「大学でラテン語を学んだ」と言いたい見栄（現に今もこうして言っている）があったからこそ、一週間の自由に使える時間のほとんどを予習に投入しなければならなかった、あの「恐怖の」ラテン語の授業に耐えていけたのだと思う。

「ポルトガル語は、しゃかりきになってやるものじゃないですからねえ」と言った彼が、この種の見栄にこだわってポルトガル語を学習していたわけではないだろう。一言で言って、軽い気持ちで選んでいたのだ。こうした態度は、実はポルトガル語を履修する多くの諸君が共有するものだという点に私は気付き、その上で今も教壇に立っている。「軽いノリ」でポルトガル語を初めていただいて結構。でも、どうか続けてみてほしい。その上で、例えば、ある言語が「易しい」とか、「難しい」とはどういうことなのか、「ブラジル」にまつわる一般に流布したイメージとポルトガル語はいかなる関係にあるのかといったことを考えてみてほしいし、考えるきっかけを与えることができるような授業にしていきたいと考えている。



立教A「大学と科学技術」を担当して

本学兼任講師 柿原 泰

2012年度から新カリキュラムがスタートするのに伴って新たに開講されることになった科目「大学と科学技術」を担当しました。新設の科目であり、かつ本学の全カリの講義を担当することも初めてでしたので、どのような講義にしようか、依頼を受けてからしばらく迷いました。受講者数も蓋を開けてみないとわからないなか、講義内容を考え、実際に講義を始めてからも手探りの状態で進めていくことになりました。

立教科目群「立教A（講義系）科目」の中の柱のひとつである「大学」をテーマとする科目ですが、他にも多くの「大学」関連科目が開講されていますので、本科目はとくに「科学」ないし「科学技術」に焦点をあてることが期待されているのだらうと思いました。私は、科学・技術について歴史的アプローチを軸にして社会的側面や思想的側面から考察する科学史・科学技術論を専攻する者ですし、またこの科目の性格からしても、個々の科学技術の専門的な内容を理解することを目的とするのではなく、「文系・理系の区別を越えて、科学技術の絡む社会的諸問題を考える」という授業の目標を掲げました。

「文系・理系の区別を越えて」と掲げた意図は、素朴にいえば、文系と理系の区別を自明視し、「科学技術」は理系のもので、文系にとっては縁遠く、考察の対象外であると見なす傾向に疑問を投げかけてみることでした。学校の理科のように、既に確立した知識を学び、ただ一つの正解に辿り着けると見なされがちなのに対して、「科学技術の絡む社会的諸問題」は、科学的に調査・研究をすれば唯一の正解に辿り着けるとは限らない、いろいろな要素が絡まりあった問題であることが多いことを把握しようというねらいを込めました。そこで、「文系・理系の区別」について考えることから講義を始め、その区別を越えて考えるというねらいを話していったわけです。

講義では、具体的なトピックとしては、現在、喫緊の関心事となってしまった原子力や放射能の問題、遺伝子組み換えやBSEなどの食をめぐる問題、公害・環境問題などについて、ところどころで例示しながら、たとえば、「科学的」とはどういうことかと考えてみたり、科学研究の進行プロセス（学会発表→学術雑誌の論文査読→公刊論文のさらなる検証…）を説明したりしました。一言でまとめれば、本科目では、大学・学問・科学のあり方を社会とのかかわりの面から考えてみようとしたわけです。

前期の講義を終えたいま、振り返ってみていくつか感じたこと、反省点を挙げてみます。毎回の講義の終盤にリアクション・ペーパーを提出してもらい、翌週にそれらに対するこちらの応答を講義の冒頭で話すという形式をとりましたが、せっかく多様な学部・学科の学生が出席しているのですから、その点を生かすような工夫をできればよかったかな、と反省しています。

中間レポート課題で、講義に関連する新書クラスの書籍を読むように指示したのですが、その課題提出が終わった後の学期後半の講義では、自ら本を読んで理解が進んだためか、学生の反応も変わり、リアクション・ペーパーに書いてくる分量も多くなる傾向がありました。できればもっと早い段階で、そのような課題を出しておいたほうがよかったかもしれません。当初考えていたトピックで結局取り上げることができなかったものもあり、もし次の機会を与えられることがありましたら、それらの反省点に留意し、よりよい講義ができれば、と考えているところです。



領域別A「生命科学入門」を担当して

本学理学部教授 松山 伸一

「生命科学入門」は文系学部学生のみを対象とした領域別A（講義系）科目なので、私は「持続的な好奇心」と「科学の眼」を養うことを目標として掲げ、科学リテラシー（読み解く力）を軸に授業を展開している。それは、マスコミやインターネットを通して発信される玉石混淆の情報の中から有益情報を見極める力が、現代社会を生きていくために必要だと痛感しているからである。とりわけ、生命科学の進歩は著しく、新しい知見に基づいた商品やサービスが次々に生まれているが、それらの中には科学的検証に耐えられないいいかがわしいものや能動的に判断を迫られるものも少なくない。学生たちは健康、美容、ダイエット、食、環境など日常生活と密接に関わる事象に高い関心を示す一方、それらに関連した基礎知識や理解力は乏しく、発信された情報を鵜呑みにしていることが多い。疑似科学の蔓延や被害を防ぎ、科学の恩恵を正しく享受するために、国民ひとり一人にリテラシーが求められている。そこで、高校レベルの基礎知識とテーマごとに与える若干の専門知識を駆使して身近な問題を論理的に理解できるように解説し、リテラシーの必要性を実感してもらうように努めている。たとえば、「コラーゲンを食べると肌がきれいになる」と国民レベルで信じられている現代の神話に関しては、「コラーゲンをはじめとするタンパク質は胃腸の消化酵素でアミノ酸に分解された後、体内に吸収されて10万種類のタンパク質の材料となる」ことに気づかせ、「もし食べた牛や魚のコラーゲンがそのまま肌に到達したら、ヒトのコラーゲンとは構造が異なるため異物として認識され、アレルギー反応が起きてたいへんなことになる」と説明すれば、「だまされていた！」と学生は驚く。

月曜日1時限に開講されているので、履修者は50名ほどで私語もなく、学生も私も授業に集中できる。意識の高い学生が集まっているので、授業ごとに課すリアクション・ペーパーには熱意を感じさせる鋭い考察や理學部の学生でも思いつかない質問などがたくさん記述されており、いつも楽しみにしている。また、質問とそれに対する私の回答、寄せられたコメントなどは全員で共有できるように印刷して翌週に配布しており、科学に対する知的好奇心や理解を高める一助になっているようで嬉しい。

文系の学生が生命科学を自学することは容易ではなく、リテラシーを身につけたいと考えている学生の要望に応えられる教育機会も少ないのが現状ではないだろうか。この「生命科学入門」を通して、生命科学のおもしろさを伝えるとともに、知識が机上にとどまることなく、履修後も積極的にリテラシーを向上させて日常生活や社会との関わりの中で生かしてもらえるように、学部の垣根を越えた総合的な科学教育をめざしたい。



【大学教育学会参加報告】

転換期の大学教育？ ～大学教育学会第34回大会参加報告

総合教育科目構想・運営チームメンバー／本学学校・社会教育講座教授
下地 秀樹

5月26日、27日の両日、全カリ事務室の里村さん、飯塚さんとともに、第34回大学教育学会大会に参加した。会場は北海道大学高等教育推進機構。北大には何度も訪れたが、ここに足を運んだのははじめてである。付近にクラーク像などがある正門ではなく、北18条門から入る。両門間は地下鉄のひと駅分以上の距離。言わずもがなながら、大都市のほぼ中心部にあって、キャンパスは信じ難いくらい広い。

参加して、まず驚いたと言っては語弊があるが、予想以上だったのは本学教職員の参加の多さである。ゆうに二桁であった。寺崎昌男さん（調査役）、佐々木一也さん（文学部）のように、本学会の企画にも関わる方はもとより、自主的な研修目的の方もいた。また、なつかしい檜枝光太郎さん（元理学部長、大学教育開発・支援センター長）にもお会いした。本学関係者は、一群ではないが、間違いなく会場の一大勢力であった。

統一テーマは「転換期の大学教育」。2日間でラウンドテーブル16題、自由研究発表91題、二つのシンポジウムのほか、基調講演、そして緊急シンポも行われた。気忙しい日常を送る者としては、広大な大地でライラックの香りにでも酔い痴れようかと夢見たが、叶わぬ日程である。ちょうどライラック祭りの候なのに、大学人は嗅覚など鈍磨させるしかないのだろう。ただ、せめて夜くらいは、北海道ならではの湿度と味覚をそれなりに堪能させてもらった。そうでなければ、わざわざ特定の場所に人が集まって話す意味は乏しい。

さて、何を取りとめのないことをとの排りが聞こえてきた。紙数が許す限り、まじめに会場の熱気の一部を伝えることに努めよう。

第一日午前のラウンドテーブルは16もあるので、あらかじめ本学の参加者と相談し、うち三つを選んで参加することにした。寺崎先生たちは「カリキュラム・マネジメントにおける教職協働」の企画者である。「教職」とは僕が本学で所属する教職課程の略ではない（誰もそんなこと思わないか？）。教員と職員の協働ということだが、僕は「学習成果の直接評価に向けて一パフォーマンス評価の可能性」を覗いてみることにした。

本学会が何より興味深いのは、狭義の教育（学）研究者はむしろ少なく、多様な領域の研究者が集っていることである。この企画は、松下佳代氏から京都大学高等教育研究開発推進センターのスタッフが中心となっているが、松下氏のような教育研究者とその他の領域の研究者との理想的な学際的交流協議の場となっていた。

まず松下氏は、企画の趣旨を説明するとともに、「質的評価としてのパフォーマンス評価—その起源と理論」と題し、パフォーマンス評価について実に手際のいい概観を披露した。とても真似はできないので要点だけ摘み食いすると、学習成果の「直接評価」として実演や作品に基づいたそれは大学教育でも日常的だが、ともすれば担当教員の主観的評価になりがちな一方、客観化・厳格化と称してGPA導入をはかるといった誤った対応、「妥当性」が疑わしい標準化が広まって

いる。また、評価の主観化を防ぐ観点からループリック（評価基準：尺度と特徴の記述）が用いられる場合も、それはパフォーマンス評価の「信頼性」を担保していく一つの基礎的手段に過ぎないことの理解が十分ではない。ループリック等で評価基準を共有し、複数の評価者間で調整作業を行い、評価事例を蓄積し、評価者のトレーニングを行う必要がある、ということである。松下氏は、標準化に陥らないパフォーマンスの質的評価を目ざすAAC&U（American Association of Colleges & Universities）のVALUE（Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education）プロジェクトを紹介した。ここで共同開発されたループリックは、メタ・ループリックとして各大学・学科の実情に応じたローカライズをはかるためのものである。僕には、主観にも標準化にも陥らないという質的評価へのあくなき営為の跡が、非常に印象深かった。この通りだとすれば、協会なるものの指摘に狼狽えるようでは、その隔たりは絶望的と言わねばならない。

この報告に、同じセンターの坂本尚志氏による「哲学教育における評価—フランス・バカロレア哲学試験を例に」、小野和宏氏（新潟大学歯学部）「大学学習法へのパフォーマンス評価の導入—新潟大学歯学部の初年次教育の場合」、平山朋子氏（藍野大学医療保健学部）「基礎的臨床能力の評価と学習—理学療法教育におけるOSCE-R（Objective Structured Clinical Examination Reflection Method）の開発と実践」という多彩な領域の事例報告が重なり、新潟大の事例に対しては、やはり京大センターの高橋雄介氏による「一般化可能性理論を用いたパフォーマンス評価の信頼性の確認」と題した分析が加えられ、効果的な評価設計の検討が行われた。それぞれ条件が異なり、全カリに直接適用できることではないが、いずれもその試行錯誤の跡が眩しかった。とくに新潟大の事例は、特定の専門性を目ざす学生たち対象としても、目標は一生ものの「大学学習法」の確立、自立・自律した学習者を育てることで、全学共通教育にとって示唆は大きいはずである。

午後は鈴木章氏（北大名誉教授）の基調講演「ノーベル化学賞への道」を拝聴した。その後と二日目午前は自由研究発表、さらに午後には二つの同時進行シンポジウム。圧倒的多数が「学士課程教育の質の改善と教育情報」に向かうので、天邪鬼な僕は「転換期における科学リテラシー教育の課題」に出席した。いや、僕には絶対にこちらの方が重要と思われた。大会全体として、多様な領域の研究者が自由に討議していた。それが本学会の欠かせぬ長所だろう。だから、統一テーマの意味も、大学教育は転換期だと強調したいのか、転換期だから大学教育も何とかしようということなのか、両方なのだろうがよくわからなくても、それでいいのだろう。そんななかで、おそらく最も明確に転換期を意識していたのはこのシンポジウムである。未曾有の震災が一つの契機には違いないが、現代社会における科学リテラシーは市民と社会と大学が交叉するまさに喫緊の最重要課題と認識する必要がある。詳しく紹介したいが、割愛するしかなくなった。残念！

全カリ部長の青木さんはじめ総合構想・運営チームメンバーの方々、全カリ事務室の方々の寛大な配慮のもと、僕たちは「教職協働」をささやかながら実践できていると思っている。外を向くことができる大会参加者の多さは心強い。この流れに、少なくとも水を差すことなく、掉さしていくことが本学の重要課題の一つではないだろうか。

「大学」への気づき

本学職員／教務部全学共通カリキュラム事務局 飯塚 琴乃

5月26日、27日、入職をして2ヶ月が過ぎようとしていたころ、北海道大学で行われた大学教育学会に参加をした。入職したばかりで、学内で行われている会議の内容すらなかなか理解できないような状態での参加ということで、実のところ、学会で聴いた話も、頭の中で「？」に変換されて蓄積していくばかりだった。そのため、Newsletterの原稿執筆依頼がきたときも、この「？」をいかに言語化すればよいのか、そもそも「？」を言語化するのは参加報告にならないのではないかと、非常に戸惑ってしまった。私の原稿がA4、1枚分の紙面を割いてしまうことはとても心苦しいのだが、あくまで大学を卒業したばかりの、新入職員の拙い考えと驚きを述べた文章ということを前提に、読んでいただきたい。ただ、入職間もないこの時期に大学教育学会に参加をしたことで、「これから目指していくべき大学職員とは何か」を真剣に考えるきっかけとなる経験ができ、感謝をしている。この経験が日常の業務に活かされているかどうかは、ぜひ長い目で見守っていただければと思う。

1日目には本学の教職員も関わっているグループのラウンドテーブルに参加した。「教職協働」というテーマであったのだが、正直なところ「学会」という場で職員が発表をするということが、私にとっては驚きであった。事前にプログラムを確認してはいたものの、やはり「学会＝教員のためのもの」であるという認識があったということと、研究機関としての役割をもつ「大学」自体が、研究対象になるという考えがなかったからである。さて、話は戻るが、山形大学、愛媛大学、大阪府立大学各校の調査報告、各校代表者による討論という内容であった。興味深かったのは、山形大学が行っていた山形大学を卒業した職員企画による1年生向けの授業があるということだ。さまざまな分野で働く卒業生を招き、自分たちの過ごしてきた大学生活を話してもらうことで、1年生に今後どのような大学生活を過ごしていきたいかを考えるきっかけをつくるというものだった。しかし、今年度は県内各地にキャンパスがある山形大学であるがゆえ、部署異動により継続することができなかったそうだ。職員有志による運営だけでは、日常業務との関わりが継続していく上での難しい課題であると知った。また、大阪府立大学の報告では、知事が変わったことにより大学の体制が大きく変化していく様子を聞くことができた。大阪府のあの動乱が大学にも影響をしていたのかという驚きが、私の中で印象に残っている。

2日目の午後は「学士課程教育の質の改善と教育情報」というテーマのシンポジウムを聴いた。4名の教員によるプロセス評価や、教育情報の活用についての話だった。「学士課程教育の質改善に寄与する高機能GPAエビデンス」というテーマの報告では、現在多く適用さ

れているGPA制度では成績の順位変動が生じてしまう可能性があるという内容であった。大学という教育の場にとって、いかに成績評価が重要であり、難しい課題であるかということを実感した。個人的な話になるが、私の家は、父が小学校教諭であるため、小さな頃から、学期末には毎回父が徹夜をしながら、時には母もサポートをして大慌てで通知表をつけていた記憶がある（母が手伝っていること、家に成績を持ち帰っていることは、個人情報保護の観点で現在ならば問題があるかもしれないが、あくまで過去の話ということ）。小・中・高までのように多くて40人程度のクラスで、授業以外の時間も共有していれば、教室内の児童・生徒の様子も把握でき、評価もしやすいだろう。また、小学校のようにほぼ全科目を担当がもつようであれば、科目ごとによる成績基準の大差はない。しかし、大学はそうではない。大人数の授業もあるし、科目ごとに担当者も異なる。それゆえ、全学生に対する成績評価の公平性を保つことがいかに難しいことかを知った。学生時代の「あー、あの先生は優しいからSくれるよ」というたわいもない会話は、職員という立場になったことで、大学として、好ましいことではないことに気付いた。2万人弱の学生が在籍する本学であるが、学生は「個」であり、成績に関してもさまざまな事情がある。それぞれの学生にとって最善の方法を目指したとしても、あくまで2万人弱の全学生の公平性は保たなくてはいけない。その均衡を保つことは非常に難しいのだと日常業務を経験する中で強く感じる。だからこそ直接的に成績評価を行う教員だけでなく、職員も適正な成績評価の仕組づくりに知恵を出すことが必要なのだろう。

「教職協働とは何か」を理解しようと、自分なりに目標をたてて参加をした本学会であったが、目標達成どころか、大学で働くということに対する自分自身の認識の甘さに気付かされる機会となった。就職活動をするにあたり、業界研究、企業研究をし、大学職員も教員とともに大学をつくりあげていく一員であるという意識をもって4月を迎えたはずだった。しかし、「協働」する存在であるためには、私が考えていた以上に、大学に対する専門的な知識や、社会からのニーズに対応していく力を持っていなくてはいけないということも、今回気づくことができた。この気づきを得ることができただけでも、今学会に参加した私なりの大きな収穫があったと思う。

さて、新入職員が初めて見る世界にびっくりしてしまった様子くらいはお伝えできただろうか。全くもって参加報告になっていないことに関しては、ご容赦いただくとして、もし、またこのような文章を書く機会があるならば、そのときまでにはしっかりと報告ができるよう成長していることを期待してもらえればと思う。



2012 年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2012 年 9 月現在

〈全カリ委員会〉

役職名	氏 名	所属	
部 長	青木 康	文 史	
副部長	菅沼 隆	済 経政	
チーム リーダー	新野 守広	異 異	言語チーム
	中島 俊克	済 済	総合チーム
運営センター 委員	栗田 和明	文 史	文学部長
	池上 岳彦	済 経政	経済学部長
	家城 和夫	理 物	理学部長
	間々田 孝夫	社 現	社会学部長
	佐々木 卓也	法 政	法学部長
	村上 和夫	観 交	観光学部長
	松尾 哲矢	福 ス	コミュニティ福祉学部長
	松井 泰則	営 国	経営学部長
	堀 耕治	現 心	現代心理学部長
	池田 伸子	異 異	異文化コミュニケーション学部長
	郭 洋春	済 済	教務部長

〈言語教育研究室〉

研究室名	氏 名	所属	
英 語	主任 森 聡美	異 異	
	Allum,Paul H.	異 異	
	Caprio,Mark E.	異 異	
	Cousins,Steven E.	異 異	
	Cunningham,Paul A.	異 異	
	藤田 保	異 異	
	河合 優子	異 異	
	川崎 晶子	異 異	
	小林 悦雄	異 異	
	Martin, Ron	異 異	
	師岡 淳也	異 異	
	灘光 洋子	異 異	
	中谷 一	異 異	
	実松 克義	異 異	
	佐竹 晶子	異 異	
	高橋 里美	異 異	
	高山 一郎	異 異	
	武田 珂代子	異 異	
	鳥飼 慎一郎	異 異	
	山田 久美子	異 異	
	山口 まり子	異 異	
ドイツ語	主任 浜崎 桂子	異 異	
	新野 守広	異 異	
フランス語	主任 小倉 和子	異 異	
	石川 文也	異 異	
スペイン語	主任 中川 理	異 異	
	佐藤 邦彦	異 異	
中国語	主任 飯島 みどり	異 異	
	細井 尚子	異 異	
諸言語	主任 谷野 典之	異 異	
	石坂 浩一	異 異	
	イ ヒヤンジン	異 異	
	新野 守広	異 異	

*1 言語チームリーダーとの兼務

〈総合チームサポーター〉

	氏 名	所属	サポート グループ	*2
学部選出	加藤 磨珠枝	文 キ	人文学	
	山縣 宏之	済 済	社会科学	
	黒田 智明	理 化	自然・情報	
	高木 恒一	社 現	社会科学	
	早川 吉尚	法 国ビ	社会科学	
	韓 志昊	観 観	社会科学	
	芝田 英昭	福 福	社会科学	
	有馬 賢治	営 営	社会科学	
	香山 リカ	現 映	人文学	
	黒岩 三恵	異 異	人文学	
総長任命	長島 忍	理 数	自然・情報	
	石坂 浩一	異 異	社会科学	
	石渡 貴之	福 ス	スポーツ人間	
	Davis,Scott T.	営 国	社会科学	
	林 もも子	現 心	スポーツ人間	
	浜崎 桂子	異 異	人文学	

*2 サポートグループ

- 人文学系サポートグループ
- 社会科学系サポートグループ
- 自然・情報科学系サポートグループ
- スポーツ人間科学系サポートグループ

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	新野 守広	異 異	
メンバー	森 聡美	異 異	英語教育研究室主任
	浜崎 桂子	異 異	ドイツ語教育研究室主任
	小倉 和子	異 異	フランス語教育研究室主任
	佐藤 邦彦	異 異	スペイン語教育研究室主任
	細井 尚子	異 異	中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異 異	諸言語教育研究室主任

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏 名	所属	
リーダー	中島 俊克	済 済	
メンバー	下地 秀樹	講 教職	
	溜箭 将之	法 国ビ	
	西山 志保	社 社	
	安松 幹展	福 ス	
	山高 博	理 化	

全カリニュースレター No.32

印刷 2012. 9. 18

発行 2012. 9. 27

発行人 青木 康

編集人 佐竹 晶子、中島 俊克

発行所 立教大学

全学共通カリキュラム運営センター

印刷 株式会社 白峰社